

## 呪術とアイロニーについての人類学的覚書

東, 賢太郎  
宮崎公立大学

<https://doi.org/10.15017/2341036>

---

出版情報 : 九州人類学会報. 34, pp.48-54, 2007-07-21. Kyushu Anthropological Association  
バージョン :  
権利関係 :



## 呪術とアイロニーについての人類学的覚書<sup>1)</sup>

東 賢太朗 (宮崎公立大学)

### I. はじめに

本稿は、アイロニーという概念を導入することにより、呪術研究と人類学の新たな展望を構想するための試論である。人類学や隣接領域におけるこれまでの研究蓄積は、呪術の一見した徹底的な他者性の背後に、実は私たち誰しもが避けようもなくとらわれてしまうリアリティがあることを明らかにしてきた。例えば、呪術が類似性(隠喩)や隣接性(換喩)による観念連合<sup>2)</sup>を因果関係と取り違えた誤謬、すなわち誤った科学であると主張したフレーザーに対し[フレーザー 1951-1952]、ウィトゲンシュタインは呪術の根源的な無根拠性を指摘した上で、それは誤謬などではなく「生のあり方」そのものであると批判している[ウィトゲンシュタイン 1975]。これは、呪術の他者性とリアリティの表裏一体性をよくあらわす対話だといえるだろう。また、マリノフスキーに代表される機能主義的な立場からは、呪術が当事者にとっては目的達成のための効果を持つ技術であるという呪術の実効性が指摘されている<sup>3)</sup>[マリノフスキー 1980]。構造主義の呪術論においても、レヴィ=ストロースはモースのmana概念[モース 1973]を発展的に継承しながら、呪術的思考に特徴的な意味されるもの(シニフィエ)に対する意味するもの(シニフィアン)の過剰さを「浮遊するシニフィアン」と名づけ、呪術の実体へと接近している[レヴィ=ストロース 1973]。近年では、コマロフ夫妻やゲシーレに代表される呪術と近代論者によって、近代化とともに消滅する

のではなくむしろ活性化する呪術的な実践や想像力が、近代における不確定性や脆弱性に対する抵抗やメタ・コメントとなっているという主張がなされ[Comaroff & Comaroff 1993; Geschiere 1997]、呪術が単に他者性を帯びているだけでなく、現実的な政治経済的条件に根ざしたリアリティを有していることが再確認されている。

このように、呪術論を一瞥しただけでもその系譜はつねに他者性とリアリティの間で揺れ動いている。異文化や他者に対して差異を強調するのか同一性を主張するのかという大きくは人類学的な相対主義と普遍主義の葛藤や調停へと連なる以上の問題について、本稿ではアイロニーという概念の導入を通じて新たな展開を模索しようと試みる。後に詳しくみるが、アイロニーを暫定的に「一方では対象に没入しながら、他方で対象との距離をとりつつ反省的に捉える表現や態度、または心的状況」だと定義すれば、それが呪術論に一貫して流れるリアリティと他者性の共存という状況を言い表すのに適していると予想はできるだろう。またそれが新たな展開へとつながるという予感、アイロニーが単に呪術的な想像力や実践についての説明概念となるにとどまらず、フィールドワークや参与観察という人類学的営為についての構想にもなりうるという見通しにもとづいている。

以下本稿では、まずアイロニーを用いてなされた近年の政治哲学や社会学、批評など諸領域からの業績を概観した後に、ある1名の人類学者による実験的民族誌を題材として呪術というコンテクストに

アイロニーを位置づける。その後、呪術研究と人類学の展望についてアイロニーとの関わりから構想する。

## II. アイロニーについて

アイロニーという概念は、その取り扱いの難しさにもかかわらず、近年様々な分野で用いられるようになってきている。取り扱いが難しいのは、アイロニー概念自体がメタ的な意味合いを含んでいるので、決定論的な物言いにそぐわないからである。例えば、アイロニー的な事象について「アイロニーである」と名指すことは、その瞬間にそれに対する反省的・批判的なまなざしを呼び起こし、メタ・レベルとの矛盾や背理を生み出してしまふ [仲正 2006: 186-187]。その意味でも、アイロニーは分析概念としてより、パフォーマンスな表現や態度として用いられることが多い。近年、アイロニーという言葉をもっとも広く知らしめたのは、政治哲学者リチャード・ローティによる『偶然性・アイロニー・連帯』という著作であろう。そこにおいては「リベラル・アイロニスト」として、一方で「残酷さこそ私たちがなしうる最悪のことだ」と考えるリベラルの立場をとりながら、同時に他方で「重要な信念や欲求は、時間と偶然の範囲を超えた何ものかに関連しているのだ、という考えを棄て去るほどに歴史主義的で唯名論的」なアイロニストでもあるというプラグマティックな政治的態度が主張されている [ローティ 2000: 5]。ここにおいてアイロニーは、ポストモダン的な「大きな物語の終焉」 [リオータル 1989] の時代における現実的な社会変革を導くものとして機能している。ローティの「リベラル・アイロニスト」という立場は日本においても積極的に評価されており、例えば近年、宮台真司は究極の意味が不在の「終わりなき日常」を生き抜くために、「天皇制」や「巫

細亜主義」というロマンの対象を「あえて」導入することを主張している [宮台・仲正 2004; 宮台・北田 2005]。それは、アメリカにおけるリベラリズムに代わる、日本的な共同幻想をアイロニカルに信奉するという時代への処方箋である。しかしながら、日本におけるアイロニー的生き方の浸透については、宮台とは正反対の評価も下されている。例えば、大澤真幸は、オウム真理教によるサリン事件の分析から、共同幻想的な対象に対して反省的に距離をとり、虚構であるとたしかに認識しつつも、実際の行為においてはその対象に没入していく信者の状況を見出し、それを「アイロニカルな没入」と述べている。このような虚構へのアイロニー的な信奉は、原理主義やファシストにも共通するものであり、さらには自覚的であるがゆえに、そうではない場合よりも没入の度合いはより深いとして警鐘を鳴らしている [大澤 1996]。また北田暁大によれば、ナショナルな共同幻想の実在性が希薄である日本にアイロニー的な精神のみを注入した場合、アイロニーが空転してシニシズムへと転化する危険性があり、また現在ネット空間でみられる冷笑的な右翼化がすでにその実例であるという [北田 2005]。これら現代日本社会にみられるアイロニー的生き方への懸念や批判について、アイロニカルな批評という立場から再批判を行っているのが、仲正昌樹である。仲正は、大澤の「アイロニカルな没入」や北田の「アイロニーからシニシズム」への否定的見解とは、社会的コミュニケーションにおけるアイロニー的な表現形態、すなわちオブジェクト・レベル (分析される対象についての記述) についてなされたものであるという。これは、「アイロニーについてのアイロニー抜き社会学」であり、メタ・レベル (「対象と自己」の関係についての記述) での反省的視点はここには含まれていない。つまり、記述者として

の立場の拠り所はアイロニカルなまなざしに晒されることはない。それに対して、仲正が主張するアイロニカルな批評的立場とは、オブジェクト・レベルとメタ・レベルが連続した「アイロニーについてのアイロニカルな批評」であり、その両者は両立可能である。しかしながらオブジェクト・レベルで指摘されたアイロニーの危険性をそのままメタ・レベルへと横滑りさせることによって、大澤や北田がアイロニスト批判を行っているとするれば、それはメタ・レベルでの反省的視点を欠きたいわば神の視点による決定論であり、アイロニストであればその批判の根拠をアイロニカルに疑うべき立場にあるという [仲正 2006: 220-226]。以上、入れ子構造をなしたいささか複雑な議論であるが、ここで指摘しておきたいのは、アイロニーについて考える際にはオブジェクト・レベルとメタ・レベルの連続性、すなわち観察対象と観察者の分析が分かちがたいということに留意する必要があるということである。それゆえに、繰り返しになるが、アイロニーがパフォーマティブでプラグマティックな文脈において用いられる傾向があるのも不思議ではない。そして、ここに、呪術について、また人類学についてアイロニーという視座を導入する必要性が喚起されるのである。

### Ⅲ. 呪術のアイロニー、人類学のアイロニー

呪術における他者性とリアリティの共存について、「そんなはずはない、だがしかし…」 (“I know..., but still...”)

[Favret-Saada 1980: 51-52] というつぶやきによって端的に言い表したのはファヴレ=サアダである<sup>4)</sup>。そしてそのつぶやきは、調査地フランス・ボカージュ地方のインフォーマントたちによるものでありつつ、調査者であるファヴレ=サ

アダ自身によるものでもある。調査開始当初は、そんなものは存在しないというインフォーマントの反発に阻まれ、呪術に近づくことさえできなかったファヴレ=サアダは、ある事件に巻き込まれることにより、呪いをめぐる言説の争いに関与することになる。その状況においては、不偏不党で客観的な観察者としてのスタンスなどとりうることは不可能であり、利害を含んだ争いにおいてある1つの立場を占めることが否応なしに要求される。つまり、その時点ですでに人類学者とインフォーマントの関係性を指し示すオブジェクト・レベルとメタ・レベルがねじれ、その区分が曖昧になっているのである。さらに、そのような争いの中で「やるかやられるか」という選択をどうしようもなく突きつけられて、当事者であるインフォーマントと人類学者がともに発するのは、先述の「そんなはずはない、だがしかし…」という曖昧なつぶやきである。呪いなどありえないのはわかっているけれど、それでも何だか不安で恐ろしい、だから何らかの対抗措置(占い、呪術、儀礼など)をとる。そこにおいて、信じていないはずの呪術のリアリティを感覚的には実感し、ときに行為において実践するという矛盾、すなわち呪術の他者性とリアリティの共存状況が成立する。

もちろん、すべての人類学者が呪術世界におけるリアリティをインフォーマントと共有する／できるわけではないだろうし、またインフォーマントの間でも呪術的リアリティを受け取る際の濃度は状況に応じて異なるだろう。しかしながら、「そんなはずはない、だがしかし…」という決定不可能で曖昧な態度が、誰にとっても呪術のリアリティへの入り口になりうるということはいえるだろう。通常時は所与のものとして疑うことがない合理的な思考が、あるときある状況において突然非合理的な感覚や行為と矛盾しながらも両立する<sup>5)</sup>。呪術的想像力が発動し、

呪術的な実践が開始する契機がそこにある。このように、一方では呪術に対して合理的に思考し、距離をとりつつ反省的にその非合理性を指摘しながら、もう一方では呪術への実感や行為の側面で没入していく態度を、本稿ではアイロニーとして考えてきた。大澤の用語を借りれば、呪術に対する「アイロニカルな没入」と呼ぶことができるだろうか。では、いったい呪術にみられるアイロニーを指摘することは、何を明らかにするのだろうか。第一に、それはこれまで脈々と続いてきた呪術についての二項対立をめぐる論争に一応の決着をつけることができるだろう。呪術とアイロニーを結びつけることによって、もはやそこに共存する他者性とりアリティを二者択一のものであるとする必要はなく、その間を揺れ動く運動体として捉え、またそういったアイロニカルな呪術に対して合理でありつつ非合理、現実的でありながら非現実的というアイロニカルな態度がとられうると考えること。それは、呪術についてのわかりやすい決定論的な説明を拒否しながら、日常の実践においては無限に繰り返されるであろう不安定な曖昧さと向かい合うというマニフェストでもある。そのようにして、呪術研究の今後の展開は構想できるだろう。

しかしながら、呪術とアイロニーについて考えることは、呪術論の学説史を超えてもう少し広い眺望をもたらすのではないかとも思える。それが、人類学的実践において決定的に重要なフィールドワークにおける調査者／インフォーマントの関係性についてのものだとしたらどうだろう。人類学においてアイロニーを導入する先駆者の1人として大杉高司は、あるアルバニア映画の登場人物にみられる秩序への埋没と距離化の二重性を、同じく人類学における参与観察にも読み込み、「対象をアイロニーの欠如で特徴付けるときには、対象との関係でアイロニー

が過剰になり、対象をアイロニーの過剰で特徴付けるときには、対象との関係でアイロニーが欠如する」とまとめている [大杉 2006: 134]。すなわち、インフォーマントにアイロニーを認めず社会的な秩序に完全に埋め込まれたものとみなすとき、人類学者はその対象であるインフォーマントに対してアイロニカルなまなざしを注ぎ、インフォーマントが社会的秩序に対してアイロニカルに処しているときとは、人類学者はインフォーマントに同一化する(と錯覚する)あまり距離感のないベタなまなざしを注ぐというねじれた関係のあり方である。その上で、人類学者とインフォーマントの地続きの関係を構想する際には、アイロニーが過剰でも欠如でもない地点でバランスをとる必要があるとしている。

さて、再び呪術のアイロニーに立ち戻ると、たしかに大杉の指摘するようなねじれた関係がやはり人類学者とインフォーマントの間にも成立していることは確認できる。つまり、呪術世界にベタに埋没しているインフォーマントへの人類学者のアイロニカルなまなざしと、呪術に対するアイロニカルな態度をもつインフォーマントと人類学者の同一化である。このように考えると、ファヴレ＝サアダがインフォーマントとともに「そんなはずはない、だがしかし…」とおもわずつぶやき呪いへの恐怖を感じる時、そこにはすでにアイロニーの欠如と過度のインフォーマントへのロマン的な同一化が生じているのかもしれない。先述の大澤や北田の立場と比較すると、「アイロニーについてのアイロニー抜き社会学」においては対象のアイロニーがさらなる没入やシニシズムを引き起こすとして否定的に評価されていたのに対し、「アイロニーについてのアイロニー抜き人類学」はむしろ対象への過度の思い入れによる肯定の方向に向う。だがそのいずれにおいても、自分の立ち位置について反省的

に距離化するアイロニーが欠如している  
のである。それでは、仲正によるアイロ  
ニカルな批評の立場で想定されていた

「アイロニーについてのアイロニカルな  
批評」は人類学においてはいかに可能で  
あるか。その点について、私は以前<  
他者Ⅲ>という概念を導入することによ  
り、回答を求めたことがある[東 2006b]。  
<他者Ⅲ>とは、我々と異なった他者を  
対置化する<他者Ⅰ>と道具化する<他  
者Ⅱ>が表裏一体となって働く近代的主  
体による抑圧から逃れ出るもう1つの<  
他者>のあり方である。それは、他者表  
象に対してつねに偶然的なノイズを忍び  
込ませる脱構築的な実践であり、支配/  
被支配関係は保存したままわずかながら  
の自己表象を他者表象の中に忍び込ませ  
る複数間の表象行為の可能性である。「ア  
イロニーについてのアイロニー抜きの人  
類学」が対象を対置化する<他者Ⅰ>で  
あるとすれば、実は「アイロニーにつ  
いてのアイロニー抜きの人類学」は対象へ  
の道具化による<他者Ⅱ>として共謀関  
係にある。いまここで、アイロニーの語  
彙によって<他者Ⅲ>を語りなおすす  
るならば、それは「アイロニーにつ  
いてのアイロニカルな人類学」ということ  
になるだろうが、それではアイロニーの欠  
如にも過剰にも偏らないバランスをどの  
ように担保すればいいのだろうか。少な  
くとも、人類学のアイロニーを超えてア  
イロニーの人類学を構想するならば、そ  
ここが出发点になるのであろう。

#### IV. まとめ

以上、本稿では呪術にみられるリアリ  
ティと他者性の共存からアイロニーとい  
う発想を得ることによって出発し、その  
後アイロニーをめぐるいくつかの研究に  
みられるオブジェクト・レベルとメタ・  
レベルの非連続性と連続性について確認  
した。その上で、呪術研究にアイロニー

を導入するためにファヴレ=サアダによ  
る民族誌を手がかりとしながら、呪術を  
超えて人類学における調査者とインフォ  
ーマントの関係性について考察した。ア  
イロニーの人類学の出发点を想定すると  
すれば、それはアイロニーについてのア  
イロニカルな人類学という自他関係の新  
たな可能性の構想ともリンクしている。  
やや遠くまで来すぎた感があるが、わか  
りやすい二者択一の決定論の氾濫と、多  
くはポストモダンや民族誌批判に起因す  
る二分法を乗り越えるための語彙の圧倒  
的な欠如(喪失?)に対して、アイロ  
ニーが強力な起爆剤となるのではないかと  
いう予感を繰り返しておきたい。もちろ  
ん、そんな予感に対してもアイロニカル  
に反省することは忘れないようにしなけ  
ればならないが。

#### 参考文献

東賢太朗

2006a 「呪術=オカルトのリアリ  
ティと他者性—3つのエピソードから」  
『東南アジア・オセアニア地域にお  
ける呪術的諸実践と概念枠組に關す  
る文化人類学的研究』平成16年度～  
平成17年度科学研究費補助金基盤  
研究(C)研究成果報告書(課題番号  
16520512)(研究代表者:川田牧人),  
pp.46-58

2006b 「親密な他者—フィリピン地  
方都市の呪医実践より」『文化人類  
学』第71巻1号, pp.1-21

2007 「呪術のリアリティと他者性に  
關する文化人類学的研究—フィリ  
ピン地方都市における妖術師・カリ  
スマ刷新運動・呪医」2006年度名古屋  
大学博士(文学)学位論文

カスタネダ, C.

1974 『呪術師と私—ドン・ファン  
の教え』(真崎義博訳)二見書房

Comaroff, J. & J. L. Comaroff (eds.)

1993 *Modernity and Its*

- Malcontents: Ritual and Power in Postcolonial Africa*. Chicago: University of Chicago Press.
- Favret-Saada, J.  
1980 *Deadly Words: Witchcraft in the Bocage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- フレーザー, J. G.  
1951-52 『金枝篇 (全5巻)』(永橋卓介訳) 岩波書店
- Geshiere, P.  
1997 *The Modernity of Witchcraft: Politics and the Occult in Postcolonial Africa*. Charlottesville: University Press of Virginia.
- 北田暁大  
2005 『嗤う日本の「ナショナリズム」』 日本放送出版協会
- レヴィ=ストロース, C.  
1973 「マルセル・モース論文集への序文」『社会学と人類学 I』(有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳) 弘文堂, pp.1-46
- リオタール, J=F.  
1986 『ポストモダンの条件—知・社会・言語ゲーム』(小林康夫訳) 水声社
- マリノフスキー, B.  
1980 「西太平洋の遠洋航海者」(寺田和夫・増田義郎訳) 『世界の名著 71 マリノフスキー・レヴィ=ストロース』中央公論社, pp.55-342
- モース, M.  
1973 「呪術の一般理論の素描」『社会学と人類学 I』(有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳) 弘文堂, pp.47-217
- 宮台真司・北田暁大  
2005 『限界の思考—空虚な時代を生き抜くための社会学』双風舎
- 宮台真司・仲正昌樹  
2004 『日常・共同体・アイロニー—自己決定の本質と限界』双風舎
- 仲正昌樹
- 2006 『「分かりやすさ」の罠—アイロニカルな批評宣言』筑摩書房
- 大澤真幸  
1996 『虚構の時代の果て—オウムと世界最終戦争』筑摩書房
- 大杉高司  
2006 「映画『Intervista』と人類学」田沼幸子編『ポスト・ユートピアの民族誌』(トランスナショナルリティ研究 5), pp.131-135
- ローティ, R.  
2000 『偶然性・アイロニー・連帯—リベラル・ユートピアの可能性』(斎藤純一・大川正彦・山岡龍一訳) 岩波書店
- ウイトゲンシュタイン  
1975 「フレーザー『金枝篇』について」『ウイトゲンシュタイン全集 6』(大森荘蔵・杖下隆英訳) 大修館書店

註

- 1) 本稿は、2006年10月28日に行われた九州人類学研究会オータムセミナーでの口頭発表(「呪術・リアリティ・他者—フィリピン地方都市のフィールドワークから」と質疑応答から生まれたアイデアを展開させ、呪術とアイロニーに絞って考察した覚書である。口頭発表内容の大部分は、2006年度に名古屋大学に提出した博士学位論文[東2007]と重複しているため、本稿では詳しく扱わない。また発表内で提示した私自身の調査データについても、すでに別の場所[東2006a]で詳しい報告を行っているので、そちらを参照されたい。オータムセミナーに参加された方々、とくに浜本満氏からのコメントに大きな刺激を受けたことをここに記して、謝意を表したい。
- 2) 具体的には、類似性とは類感呪術、隣接性は感染呪術のことを表している。
- 3) この指摘が、呪術が人智を超えた不安や恐怖を取り除く機能を有するという悪名高い社会機能還元論と表裏一体であることは興味深い。理解不能な他者としての呪術を、社会システムにおける機能であると読み替えることによってのみ、機能主義は呪術の

---

効果や実効性というリアリティを手に入れることに成功したのである。

- 4) 正確には、ファヴレ=サアダは、「そんなはずはない、だがしかし…」という言明をオクターブ・マノーニから借用している

[Favret-Saada 1980: 51]。

- 5) 同様なことは、カスタネダによって「現実的リアリティと非現実的リアリティの等価性」として指摘されている。しかしながら、ファヴレ=サアダとカスタネダが異なるのは、前者が意図せずして呪術のリアリティに捕われたのに対し、後者が呪術師ドン・ファンド・ファンの弟子となり、また幻覚性植物であるペヨーテの摂取によって意図的に非現実的リアリティの領域に立ち入ったことである [カスタネダ 1974]。